

死んだらおしまい、ではなかった

大島祥明

第一章 霊はたしかに実在する

二千件を越す葬儀によって、死者の霊を実感する
霊が「わかる」とはどういうことか
死によってほんとうの「本人」が現れる

第二章 霊を実感したさまざま葬儀の体験

二千件の葬儀を行ってきたのは、霊の探求のため
「成仏しますか？」という問いに答えられなかった
これまでの葬儀とはちがう「なにか」を感じた
「本人」をたしかに実感し、霊の確信が得られた
日航機事故の副操縦士の最期の思いを実感する
「本人」がいなくてまったく「手ごたえ」がない場合
もあった

覚悟の自殺をした娘が父の口を借りて語りだす
何十年も時空を超えて「本人」が存在していた

第三章 なんのために葬儀と法要を行うのか

死んだ直後、ほとんどの人は自分が死んだことがわか
っていない

葬儀の本質は、「本人」に死んだことを悟らせること
にある

引導を渡すとは、「本人」にもはやこの世にもどれな
いことを悟らせること

「本人」が死を自覚するまでの期間はどれくらいか
未練が断ちきれないときは、なかなか成仏しない
供養は遺族の心からの祈りが本義

供養の仕方は一人ひとりちがって当然
鰻が食べたかった故人

故人の死後の状態をみるカウンセラーが僧侶の役目
子どもの成長を見守るように故人を見守っていく
本来お経とは生きている人のためのもの
故人を偲ぶことが供養になる
日々の暮らしで大切な先祖供養

第四章 大切な日々の心、日常の生き方

死んでも変わらないからこそ、いまを大切に生きる
相手を害しない生き方をする
すべてを縁ととらえて生きる
人生において大事なものは、いのちと時間

第五章 葬儀における霊的体験こぼれ話

成仏とは、人でなくなることに

平均寿命は八十歳ってほんとうだろうか
モルヒネと麻酔薬

死んだらなにも残らないと断言していた故人
「わしはまだ生きているのに」と叱った故人
百歳を越えた長寿ゆえに気の毒な方もいた

「無礼な」と立腹した兵士の霊に悩まされる
葬儀場を出たり入ったりする落ち着かない霊
実は気が弱かった自衛官

しまった！死ぬつもりじゃなかった
ものわかりのよすぎる少年

仏前での読経中に天命を終えた

お盆に“ウラ”と“オモテ”があるっで？

「収骨は左手で」と右へならえした

夢に出るのできつと生きている？

高気圧は死に神？

聾盲の方の場合は？

スーパーマンとゼロ戦パイロット